

全校の皆さん、おはようございます。

先週の金曜日、伊那西高校の積尊降誕会が行われました。全校のみなさんに持ち寄ってもらったお花で、講堂のステージが美しく飾られました。積尊降誕会は「お花まつり」とも呼ばれ親しまれていますが、お花をお飾りしてお釈迦様のご誕生の様子を表すとともに、仏様の世界である「浄土」の世界を表現しているのです。

その浄土の世界では、青い花は青い光を、黄色い花は黄色い光を、赤い花は赤い光を、白い花は白い光をそれぞれ放って輝いている、と説かれています。そのような浄土の世界に対して、私たち人間の世界では、自分と周りを比べて、自分にはないものを持っている人に憧れたり、うらやましがったりして、自分ではない他のものになって輝こうとしているように思われます。頭の中には「勉強ができるほうがいい」とか「お金を持っているほうがいい」といった思いが充満しています。このような数値や量として表し比較できるものを仏教では「量(りょう)」と言います。

この「量」に人間は囚われて、勝った負けた、損した得したということに一喜一憂しながら、それが人間の価値だと思い込み、空しく彷徨っているのです。

お釈迦様は誕生の際に「天上天下唯我独尊」と宣言したと伝えられています。それは、このような「量」の世界で彷徨っている私たちに、はかたり比べたりすることができない世界があることを教えようとしているのです。このような世界を、「量」の世界に対して「無量」の世界と言ったり、「浄土」と言ったりします。

そうかと言って、私たちはなかなか「量」の世界を離れることはできません。たとえばテストの点数や大会での結果が気になりますが、与えられる数字や賞によって自分の価値をはかろうとする根性が染みついてしまっているのです。数字や結果を求めることをモチベーションにしている現状もあります。数字や結果は、目に見えて分かりやすいからです。人間は自分たちで「量」の世界を作って、そこにしがみつき、いのち本来の尊さを見失っているようです。

「量」の世界を生きつつも、どこに人生の足場を置くのか、ということが問題なのです。私たちが生まれてくるといふことは、人間の思いやはからいを超えたことです。またいのちが終わっていくことも同じです。つまり「無量」の世界から生まれ「無量」の世界に帰っていくのです。人間は「量」の世界を作ってそこに生きているのですが、いのちそのものの故郷は「無量」の世界なのです。

「量」の世界に足場を置けば、勝つこと・得することに囚われ振り回されて生きるしかありません。「無量」の世界に足場を置くということは、勝っても負けても、損しても得しても、そこに大きな意味が見出され、与えられてあるものを精一杯輝かせ、どのような結果も堂々と受け取っていける人生になるということです。